

## 《テーマ:近代化適應異常》

「近代化」(D1)の定義(或いは概念規定)…

\*「この(相対世界の)否定と絶望を肯定と希望とに切りかへたのがクリストであり、ゲルマン民族のカトリシズムであります」(P197『日本および日本人』)。

\*「文明の進歩(近代化もそれ)の擔ひ手は、絶對者を信じたゲルマン民族(の生き方・生活の様式E=文化D1)だつた。平面的な相對主義(の生き方・生活の様式E=文化D1)からは進歩は出てまゐりません」(P198『日本および日本人』)。

\*「かういふ(相對と絶對:現實と理想)二元論的人生態度(生き方E=文化D1)は、中世のカトリシズムによつて完成されたものでせう。その源であるユダヤ教にはもちろん無かつたものですし、イエスの思想そのものにも充分に現れてゐたとは言へない。それはあくまでゲルマン民族によつて完成された世界觀(生き方・生活の様式E=文化D1)であります」(全三P199『日本および日本人』)

\* 小生がつらつら考へるに、上文の内容については、『人間の行き方・ものの考へ方』[難解又は重要文:P83~]で言ふ、「西洋(場C')の文化(D1:クリスト教文化)が今の近代化といふ一つの歴史的必然性を生み出してゐる」と讀む事が可能である。「西洋の文化(D1)=(E)西歐の生き方・生活の様式(即ち二元論)」と言ふ、「質の差」そのものが形成した歴史的必然性と言へる。恒存が上述する「クリスト教の絶對神による『統一性と一貫性との意識が人間の生活に歴史を賦與』した」がそれを物語つてゐると思ふ。つまり西歐の「二元論文化(D1)」が生んだ歴史的必然性としての近代化なのである。對するに、東洋文化・イスラム教文化には「二元論文化(D1)」が育たなかつた爲、「西洋流の『歴史』の連續性・統一性・一貫性」[rekisinoikkannsei.pdf](#)へのリンク(上枠文参照)も缺如し、故に、近代化を生み出す「歴史的必然性」を持たなかつたのである。

大事なのは其處からである。「西歐の『二元論文化(D1)』文化を持たぬ(或いは不理解)が故に、東洋文化・イスラム教文化・マルクスレーニン主義等の國々國民が、「近代化適應異常」を冒すのは將に道理・當たり前と言へる。

「神に型どれる人間の概念の探究(近代化)は、日本と同様に他國も、「科學製品は輸入できても科學精神は移植できなかつた」(『近代日本文學の系譜』)。此處に「近代化適應異常」の根源があると言へるのではなからうか。

[②言葉(F:潜在物:關係的概念・近代化諸概念)]  
《下記「關係論」で捉へられる「近代化適應異常」(D1の至小化)}  
\*「①場(西歐近代)⇒からの關係(D1: 實在物:近代化適應異常)⇒②言葉(F:潜在物:關係的概念・近代化概念)⇒②の不用法(Eの至小化)⇒△枠(各國・個人・各共同體(企業・家庭・グループ等)の①への適應異常(近代化適應異常:D1の至小化))」。  
\* 即ち、「②言葉(F:近代化諸概念)⇒②の不用法(Eの至小化)」で②と△枠(各國・個人・共同體(企業・家庭・グループ等々))との距離測定が不成立」になつた事を示す。  
\* 近代化適應異常(D1の至小化)の根源としての「②言葉(F:關係的概念・近代化諸概念)」。

《以下は近代化諸概念(F)》[即ち不用法(Eの至小化)概念(F)]  
F:メカナイゼーション(機械化)、システムライゼーション(組織化)、コンフォーマライゼーション(劃一化)、ラショナライゼーション(合理化)等々。  
近代戦(F)近代的戰爭(F)國家主義(F)[個人主義(F)⇒権利義務の契約(Eの至大化)]制度(F)や法律(F)西洋流の神(F)  
#民主主義。  
~~~~~

[神(C:クリスト教)に型どれる概念の探究(近代化)]  
\*法(神)の下の自由平等・法の支配・普遍的價値(自由・平等・基本的人權・民主主義)。  
...是等「神(クリスト教)に型どれる概念の探究(近代化)」には、イスラム圏・中國(非クリスト教圏)・ロシア(レーニン主義母胎)は「近代化適應異常」なり。又、「人道(B⇒C)に對する罪」を「内政干渉視(相對視:A'⇒A)」も然り。國際主義(國聯)も同様視(即ち、B⇒C缺如で、相對視:A'⇒A)の「近代化適應異常」なり。

(最終結果として、「個人」は統一體としての「人格的欠損」を招く事となる)

